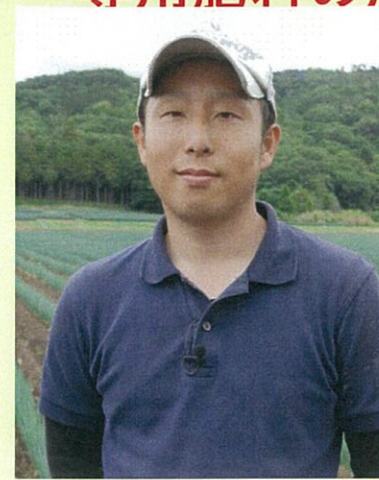


長ネギ周年栽培 専用肥料の溝施肥で減肥・省力を実現



サンアグロ
SUN AGRO CO., LTD

鍋の具はもとより、ねぎま、ネギ焼き、ネギラーメン等々。これだけ色々な料理に使われる野菜も、他にないのではないのでしょうか。今回ご出演いただいた寺田卓史さんは、就農3年目の若手生産者で、主に長ネギの周年栽培に取り組んでおられます。専用肥料を使った「溝施肥」のメリットや、栽培上のポイントについてお伺いしました。



■施肥チッソ量30%削減 追肥も1回で完了

「以前は元肥として有機化成を全層施肥し、その後、土寄せ時に最低3回は追肥をしていました。チッソ量として、反当20キロは施肥していましたが、」
「現在寺田さんは、施肥量および追肥回数を削減する目的で、『溝施肥』に取り組んでいます。」
「硫黄被覆尿素入りのネギ専用肥料を使うようになってから、溝施肥に切り替えました。元肥を植え溝に施肥して、その上に定植します。その後、1回目か2回目の土寄せ時に追肥を1回だけします。施肥回数は2回、施肥チッソ量は反当14キロ。施肥量も施肥回数も大幅に削減できました。」

■『溝施肥』のポイント

「寒い時期に定植する作型と、暑い時期に定植する作型で、元肥と追肥の施肥量を変えています。寒い時期の作型は元肥を多めにし、暑い時期の作型は少なくします。暑い時期の作型では元肥を少なくして、その分、追肥を多くします。」
「定植時期によって元肥と追肥のバランスを変えると、溝施肥の最大のポイントです。」



予め施肥した『植え溝』に、苗を植えていきます。

■春・初夏・夏・秋冬 年間4作の周年栽培

「栽培面積は約3ヘクタール。レタスと長ネギを栽培しています。長ネギは周年栽培です。」
「若手生産者の寺田さんは、就農してまだ3年。今は主として加工用長ネギを栽培されています。」
「7月定植の春採り、12月定植の初夏採り、2月定植の夏採り、5月定植の秋冬採り。うちは本数契約なんですけど、年間150万本程度出荷しています。」



長ネギの収穫作業。機械が掘り上げたネギを手で束ねていきます。

■周りから目標にされる 生産者に

「農業に携わるようになって、まだ3年です。今は基本をしつかりと身につける時期だと思っています。ただ、将来的には特別栽培や、有機JASのような特殊な栽培にも取り組んでみたい。周りの若い生産者から目標にされるような、そんな存在になれたらと思っています。」
「寺田さんの農業に対する姿勢や情熱は、すでに目標とされるに値すると思います。これからもどんどん新しいことに挑戦してください。本当に大変なお話をいただきました、本当にありがとうございます。」



■編集後記
普段、何気なく食べている長ネギ。でも栽培現場に1年間通ってみると、これは大変手間のかかる作物だということが分かります。だからこそ省力化が必要なんだと、実感できました。寺田さんの農場が、長ネギ栽培の模範農場になることを期待しています。



初夏採りのトンネル。ビニールを剥がすタイミングが重要。

「周年栽培の中で一番大変なのは初夏採りです。この作型では、定植直後にトンネルを掛けます。その後、2月下旬から3月上旬にかけて、気温の上がり具合を見ながらトンネルのビニールを剥がします。トンネル掛けするのも大変ですが、このビニールを剥がすタイミングが難しく、毎年この時期は天気とネギとにらめっこです。」
「剥がすタイミングが早すぎると寒さによって抽台し、『ネギ坊主』が出てきてしまうそうです。こうなると商品価値はなくなってしまうです。」